お仕舞いの話

この頃、三郎には気になることがあった。家内がトイレの明かりを消し忘れる。それが再三起きているのだ。お母さん、トイレを消し忘れているよ、と明るく注意すると、聴こえているのかいないのか、返事はない。何度も言って気まずい空気になるのも厭だから結局は自分の腹へ収めることにする。あるいはレンジでチンしたおかずの残りをそのままにして放っておくこともあった。特にガス台の火が点きっぱなしには思わずゾットした。火事にでもなったらエライことだからだ。指摘すると、ああ、そうだわ、忘れていた、と特段に詫びれずに、しゃあしゃあと宣(のたま)ふ。三郎の頭を過ぎるのは、ひょっとして家内は痴呆の初期の症状ではないか、という疑問である。最近では新聞でも認知症を採り上げて詳しく解説する記事が目に入るようになった。高齢化が進むと三人に一人は、その可能性が高いという。家内は三郎より四歳年上の七十歳、先日はテレビでも認知症の特集番組があって二人で揃って見たばかりである。認知症老人が町を徘徊して線路に立ち入り鉄道会社へ損害を与えたと訴えられる事件が起こり、そのことが報道されていた。家族へ損害賠償の地裁判決が下りた結果には多くの市民の同情の声が上がったらしい。そりゃあそうだろう、四六中動き回る認知症の高齢者に付き添っているわけにはいかない。その時、家内は、いゃあーねー！と呟いた。いゃあーねが患者本人を指したのか、それともそれによって迷惑を被(こうむ)る家族の嘆きを指したのか定かではない。今では年寄りの認知症はすっかり市民権を得た言葉になってきた。痴呆症の呼び名が認知症と改正されたのは十三年前の西暦二千年だったという。かってはボケ老人、恍惚の人、アルツハイマー、などの言葉としてひと目に晒されるのを恐れて部屋の中に閉じ込めたりするケースが多かった。しかし、今は日本中至るところで患者が増えるに従って高齢になれば誰もが襲われることが否定出来ないという困惑な気分が一般市民に蔓延した挙げ句、市民権を得たようだ。好いことである。自分たちも何時、その症状に見舞われないとも限らないという悩みを共有するようになってきた。けれど、認知症患者を持つ家族の嘆きは深いだろう。

三郎にもこの先、家内の症状が重く進んできたらどうしようという憂悶がないわけではない。遠く九州に住んでいる息子を呼び寄せて相談するにしても、何等良い知恵が生まれるはずがない。彼だって子ども二人を抱える家族四人、精一杯の生活状況であることは充分判っていた。これ以上、症状が進むようだったら区の相談センターへ内密に相談を持ち込むことに如(し)くはないだろうか。間違いであることを祈るしかない毎日がやって来た。禁句にしていることだけれど、三郎の外出中、家内はオレオレ詐欺で一千万円を失っている。昨年のことである。その金は大事にしていた三郎の退職金の箪笥貯金だった。これから夫婦で海外旅行でも行こうと相談したばかりの矢先に刑事が来て発覚した。恥ずかしくて到底、息子に話が出来ることではない。その頃か

ら三郎の心配が涌いたのである。世間であれほど危険なことを報道しているにもかかわらず易々と騙された家内、刑事は家内を慮って、犯行は益々巧妙になって真面目な人ほどコロリと騙されてしまうと同情する。バカな、と思うものの実際被害者はウチの家内だから尻を持って行きようがないのだ。暫く、三郎は茫然自失の日々であった。犯人が捕まって僅かでも金が戻らないかというささやかな希望。悪いことが重なる時は思いもしない悲劇が更に襲う。六十六歳を迎えた彼には血圧が高いことや夜の頻尿に悩まされる悩みがあった。会社での定期健診で高血圧を指摘されていたが、六十五歳で定年退職してからは日がな一日家でブラブラしていた。どうしても食べ物を取りすぎる傾向が生じる。戦後の飢餓感が幾つになっても抜け切らないからだ。大した趣味も持ち合わせていない彼は退屈しのぎと健康のためにテニスを始めた、入会金を払って近くのクラブへ通いだした途端の家内の痴呆の疑惑である。顔馴染みも出て毎日のレッスンが楽しくなり始めた頃に湧き上がった日常生活を送る上での家内への不安。三郎の頻尿は夜間に一時間おきぐらいの頻度でトイレに立つ。若い頃から寝室は別々だ。三郎のイビキが原因で二階の五畳ばかりの書斎部屋で彼は寝ている。家内は階下のリビングに続く六畳間で安らかに寝息を立てる。夜間のトイレ行きは、専ら忍び足で済ます。

頻尿の原因は、前立腺になんらかのトラブルが生じて起きるものらしい。前立腺肥大症、過活動膀胱、前立腺がん、加齢によるもの、糖尿病から来るもの、等であると素人知識なりに仕入れてある。新聞、テレビでも最近は健康特集番組が頻繁に組まれている。家内の様子が概ね安定した或る日、三郎は駅二つ先の大学病院の診察に出掛けた。泌尿器科で待つこと一時間、担当の四十代ぐらいの男性医師は問診表を眺めながら三郎へ日常の排尿具合を訊ねる。問診が終わると尻からの触診をした。次には診察室の隅に備えてある器具を使って看護師が尿の勢いを調べる。ちょろちょろと弱弱しく出てくる小水、勢いなんて感じはさらさらない。ウチでは稀に尿漏れもあるが医師にはそれは黙っている。己の老いをしみじみと痛感するばかりだ。次回にはＰＳＡ血液検査で前立腺癌の有無を調べるのだそうだ。帰りに薬局に行って頻尿に効果がある薬を貰う。

家に帰ると家内がぼーつと居間に座り込んでいる。ただいま、と声を掛けても反応が無い。帰ったよ、といっても三郎へ何の反応も示さない。おいおい、少し大声を上げるとやっと振り向いて、あら、お帰りなさい、の言葉が口を吐いて出た。それで彼は、やっとホッとした。肌寒い二月の薄暗くなった居間に電気が灯る。彼が点ける。ずっとウチにいたの？と訊けば、買い物には行ったわよ、と小さく答える。夕飯、面倒臭いなら、コンビにで弁当でも買って来ようか、大丈夫かい？・・・うん、ウチにあるもので作るから・・・と家内。ふっと、来月の彼岸の墓参りには今年は行けそうにないと三郎は考える。

それでも未だ料理を作り出すだけの気力はあるらしい。以前は話好きだった家内がすっかり無口になった。自分の方からは滅多に話し掛けて来ない。それと生活全体がだらしなく変化して来た。整理整頓が好きだった性格が乱雑を厭(いと)わなくなっている。人格障害？じわりじわり、痴呆が濃くなっているのではないか、そんな気がして仕方ない。軽はずみに誰にでも相談出来ることでないな、と考える。オレの病院通いも家内には一切黙っている。言ったところで今の家内があれこれと心配する情況でないことは明らかだからだ。万が一癌だったらどうしよう？・・・家内は認知症、オレは癌、そんなことがあってたまるか、そう思いながらも、我々夫婦の行く末が、当て所ない闇に突入するようなイヤな気分に苛(さいな)まれる。寝床(う)に入っても、ぐっすり眠ることが少なくなった。不安材料が深夜の床の中で、のた打ち回る、悶々と夜を明かすこともしばしばだった。

一週間後の病院で三郎は医師から生体検査を告知された。ＰＳＡ値が高いのだそうだ。生検は肛門から前立腺へ１１本の針を打ち癌細胞が無いかどうか調べる検査らしい。一泊の入院が必要となる。三郎は友人と或る用事で一日外泊しなければならないことを家内に伝えた。家内は実にあっさりと、ああ、そうですかという。何の疑いも起こさない。まるで赤の他人のような按配だ。留守中、心配だけど、と言うと、なーに、平気ですよ、ドロボウなんか来るわけないし、と澄まし顔で言い放った。自分がオレオレ詐欺で大金の一千万円の被害者に遭ったことをすっかり忘れている口振である。罪悪感(ほこさき)が持続しない家内を攻め立てたい気持がないわけではない。腹が立って怒りの矛先を何処へ向けたら済むのか、だが今更、大喧嘩をしても始まらないという感情も一方にあった。あの金があれば少しは今の気持にも余裕が生まれるだろう。且つ且つでの生活、その自覚が甦(よみがえ)る。俺が入院でもする破目になったら、どうしたらいいのだろうか、息子に援助を頼むわけにもいかないし。

生検の結果、前立腺に打った十一本の針の多くに陽性反応が出たと医師はおごそかにいう。れっきとした前立腺癌の症状で、次回、来週には骨への転移が無いか調べますから、と。・・・

三月初旬の検査で三郎の骨への転移は決定的であることを告げられる。腰に痛みなんかありませんか？との医師の質問に、ああそう言えば最近、寝ていて無性に背中や腰辺りに鈍(にぶ)い痛みがあることが多くなっていると答える、疼痛というヤツである。テニスの所為で腰が痛くなったと思うから暫くクラブを休んで様子を見る積りにしたのだ。鈍い痛みが走る腰痛は癌が原因だったのか、三郎はガクッと来た。

前立腺癌の場合、陽性であっても、そのまま何事もなく過ごす人も居れば手術や治療で進行を止める方法もありますが、あなたの場合は骨への転移が明らかです、Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄステージのすでに Ｄの最終段階に入っている、ということです、正直に病状を話して下さいとのご要望ですから包み隠さず説明するのですが気落ちしないで下

さい、急速に転移が進んでいます・・・私は出来るだけのことはする積りです、本来ならご家族の誰かに来ていただいて一緒に話を聴いて貰いたかったものですが・・・医師は三郎の目を見詰めながらそう言う。三郎の動揺を探っているような視線である。セカンドオピニオンという制度もありますから納得いかなければ他のドクターに診て貰うのも相談するのも一向に構いませんよ。・・・今後、益々痛みが激しくなるようでしたらモルヒネを使用します、副作用を恐れる人も居ますが今はそんな心配はご無用です、遠慮しないで申し出て下さい。・・・医師の慰めを上の空で聴いていた。最終ステージ、か。

その日の病院の帰り三郎は暗澹とした気分に襲われた。因(よ)りによって末期に近いステージなんて！まだまだ、生きていたかった。平均寿命には十年以上早いだろう。八十や九十の人だってザラにいるのに！無念さが込み上げて来る。六十六歳ぐらいでくたばってしまえば、人は、気の毒にねえ、とか、早過ぎるなー、と、多くの同情を呼ぶこと請け合いだ。あそこの夫婦は、旦那さんは癌、奥さんは認知症で、と哀(あわ)れがられるに相違ない。息子夫婦だって、どうして早く教えてくれなかったのか、と怒りを持つだろう。

いっその事、家内に手を掛けオレは首でも括(くく)って・・・

庭では桜が蕾を持ち始めている。開花の予想がテレビであった。寒さが長引いた所為で関東地方は三月の終わりから四月にずれ込むという。今年限りでウチの桜も見納めだろうか、昨年の花の時期には二番目の孫が小学校入学で九州から倅家族四人が来たものだ。幸せを噛み締めていた一年前。

桜は二十数年前、アフリカ難民を支援するために、或る団体の呼びかけで寄付するのと引き換えに桜の苗木十本、桃の苗木十本、を貰ったのである。友人や親戚にお裾(すそ)分けして残りの一本づつを残して狭い我が家の庭に植えた。背丈のような苗木が新築の家の小さな庭を飾ったものだ。桃は上手く根付かなかった。桜の樹は、虫が付くからイヤだと嫌う家内の抵抗を押し切って三郎が強引に植樹したのである。だから彼には愛着があった。二十五年近く経つ今では樹(みき)周りが一メートルにならんとしている。毎年、花を沢山付け近所でも評判の桜の樹になっている。何年経っても家内は相変わらず、二階のベランダの日当たりが悪いとか虫が付いてイヤだイヤだとブツブツ呟いている。そんな家内も以前は可憐な草花の観賞が好きだったが最近は園芸に見向きもしなくなっている。これも痴呆の病気から来るものだろうか。

再び、三郎に暗い想念が兆してくる。枝振りのいい、あそこへ太い紐を掛けて・・・三郎は、その妄想から逃れなくなった。その前に、家内の寝込みを襲って喉元へ手を掛ける、一瞬の苦しさだろうが、直ぐにこと切れる。彼は下着も上着も見苦しく無い新しいものに着替えて紐と空き瓶用の折り畳み箱を持つ、深夜の時刻を見計らって一気にブルーの踏み台を蹴る、首に容赦なく食い込む紐、・・・ボーツとした感覚・・・

少しづつ意識が遠のいていく、・・・早朝、歩道を歩く誰かが発見して１１９番へ通報、やがて救急車がけたたましいサイレンを鳴らして近付いてくるだろう、それまでにはとっくに三郎は事切れている。冷たい物質に変わり果てている。・・・

九州の倅には遺書を遺して置こう。妻殺しのこの家は、当分、この辺りでヒソヒソと語り継がれるに相違ない。縁起でもない土地家屋として更地になるのは明らかである。築二十五年の家屋は見る影もなく壊され庭の桜も根元から切り倒される、そうして、家屋の廃材と共にゴミ収集に出されることは確実だ。

何年かすれば、ここでの総(すべ)ての記憶が抹殺されて、誰かによって新しい建築が始まり、新しい日常生活の営みが生まれる、生命(いのち)のサイクルがなされるのだ、・・・それでいい、・・・三郎はそう確信する。

ああ！これは夢か現(うつつ)か、・・・ああ！ああ！ああ！

追い詰められた彼は目を閉じ暗闇に向けて咆哮する。棺(ひつぎ)の中に横たわる三郎、・・・頭の上でトントンと木釘を打つ音がする。・・・これで・・・お仕舞いなんだ！と。・・・